

2021年12月26日 主日礼拝

説教題「ザカリアの賛美」ルカ 1 章 57～66 節

主任牧師 加藤 誠

「すると、たちまちザカリアは口が開き、舌がほどけ、神を賛美し始めた」(ルカ1章64節)

2021年の一年間を静かに振り返る時となりました。今年の漢字は「金」が選ばれたと聞きました。オリンピックイヤーはだいたい「金」なのだそうです。皆さんはどのように振り返っておられるのでしょうか。わたしとしては、この一年間を振り返った時、漢字一文字ではありませんが、「恩寵」という文字がまず心に浮かびます。「恩寵」＝罪深い私たちにはまったく不釣り合いなほど、深く大きな神さまの恵みと慈しみ。新しい礼拝堂は「恩寵」以外の何ものでもありません。私たちの未熟な信仰、拙い祈り、足りない力をはるかに超える形で、主なる神さまは大井バプテスト教会に新しい礼拝堂を与えてくださいました。大井教会の伝道開始からちょうど90年の節目の年に与えられた神さまからの「恩寵」を私たちは決して忘れてはならない。前の礼拝堂に注がれてきた祈り、米国の南部バプテスト教会の兄弟姉妹たちの祈り、大井教会の初代の先達たちが戦争の愚かさや悲しみを経験する中で注いできた祈り。それらの祈りを受け取り直しながら、神さまから与えられた礼拝堂を、神さまの御名にふさわしく、イエス・キリストの福音を紹介するのにふさわしく用いていく。その信仰を、日々、しっかりと聖書からいただいきたいと、そう思われています。

さて、その一年の締めくくりに、今朝は祭司ザカリアがバプテスマのヨハネの父親になる箇所を選ばせていただきました。

祭司ザカリアは長い間、忠実に祭司としての仕事を担ってきた人ですが、妻エリサベトとの間に子どもがありませんでした。昔は、子どもが与えられることが神さまの祝福と理解されていたので、子どもが与えられないことは二人にとって大きな痛みとなっていたであろうと想像されます。二人は既に年老いていました。けれども、ある日ザカリアが神殿で一人、祭壇の傍らで香をたく奉仕をしていますと、天使が現れて妻エリサベトが男の子と身ごもるとのお告げを受けます。けれどもザカリアはにわかには信じることができませんでした。するとザカリアは子どもが生まれるまで口がきけなくなってしまうのです。

この箇所ですべて思い出すのは、今から30年以上前、わたしが神学生の時に通っていた教会の高齢の女性の言葉です。彼女は教会学校のクラスでこの箇所を分かち合いながらこう言いました。「ザカリアが神さまから口をきけなくされたことは、罰とは思えない。むしろ恵みだったのではないか。だって、もしわたしなら神さまに対して不信仰な言葉をたくさんぶつけたに違いないから。神さまは『黙ってわたしのすることを見ていなさい』とザカリアに大切なことを教えてくださったのではないか」と。目からウロコとはこのことで、こんな読み方、受け取り方もあるのか

と、聖書がとても立体的に見えてきた出来事として今も心に刻まれています。

高齢の自分たちに子どもが与えられるという天使の言葉は、ザカリアには青天の霹靂以外のなにものでもなかったことでしょう。「否定」(そんなことありえない!)、「不信」(ほんとうに天使なのか?)、「不安」(年老いた妻が無事に出産できるのか?)、「憤り」(今ごろ「おまえの祈りは聞かれた」なんて、神さま、遅すぎます!)など、ザカリアの心に噴き出したであろう思いを、「おまえが口にしたいことは分かっている。しかし、ただ黙ってわたしが成し遂げることを見なさい!」と、神さまは子どもが生まれるまでザカリアの口を封じられたのでした。

また妻エリサベトの立場で考えると、夫から「天使のお告げを受けた」と聞いただけでは「質の悪い冗談ね。あなた大丈夫?」と取り合わなかったことでしょうが、目の前に口の利けなくなった夫がいる以上、「神さまが何事かを起こそうとされているのだ」と真剣に受け止めざるをえなかったことでしょう。

そう考えるとザカリアの口がきけなくされたのは決して「罰」ではなく、むしろザカリアとエリサベト夫婦が、バプテスマのヨハネの両親になるという神さまの計画に向けて、その信仰を整えられるための「恵み」だったと言えそうです。

さらに想像力を逞しくするなら、口の利けなくなったザカリアは、妻エリサベトのお腹が少しずつ大きくなっていくのを見ながら、旧約聖書の御言葉をひたすら読むように導かれたのではないかと想像します。というのは67節以降に紹介されているザカリアの賛美・預言には、旧約聖書の預言書や詩編の引用がたくさん見られるからです。78-79節「これは我らの神の憐れみの心による。この憐れみによって、高い所からあけぼのの光が我らを訪れ、暗闇と死の陰に座しているものたちを照らし、我らの歩みを平和に導く」というザカリアの言葉は力強さに満ちています。彼は天使から「生まれる子は神の大切な働きを担う」と聞かされてから「これは自分たちの人生設計の計画ではなく、神さまご自身の御業の計画に招かれているのだ」と悟るに至り「これは大変なことだ、しっかり聖書を読み直さなければ」と思ったことでしょう。私たちはふつう自分の人生を自分の希望・願望で思い描き計画を立てます。けれども、私たちが聖書から招かれているのは「あなたの人生計画ではなく、神さまが思い描き祈られている計画をあなたも担っていかないか!」という呼びかけなのです。

そのようにして改めて聖書を読み直し「神さまの御業の一端を担うよう招かれている」ことを受け取ったザカリアは、心から神さまへの賛美を歌う者とされたのでした。64節「すると、ザカリアは口開き、舌がほどけ、神を賛美し始めた」。その賛美を歌うザカリアの顔はきっと大きな輝きに満ちていたことでしょう。

私たちもまた、一年の終わりに改めて静かに自らの神さまに向かうあり方を振り返りたいのです。ザカリアがそうであったように、神さまの前に静まり、「わたしの計画ではなく、あなたの計画を教えてください」と祈りながら聖書の御言葉にしっかりと聴く者にされたいと願います。